



図1 築地名苑真景草木虫魚図巻(以下「築地図巻」と略称する) 屋敷図部分 徳川美術館蔵



図2 築地図巻 江戸湾図部分



図3 築地図巻 草本部分



図4-1 築地図巻 メナダ部分



図4-2 築地図巻 メナダ部分

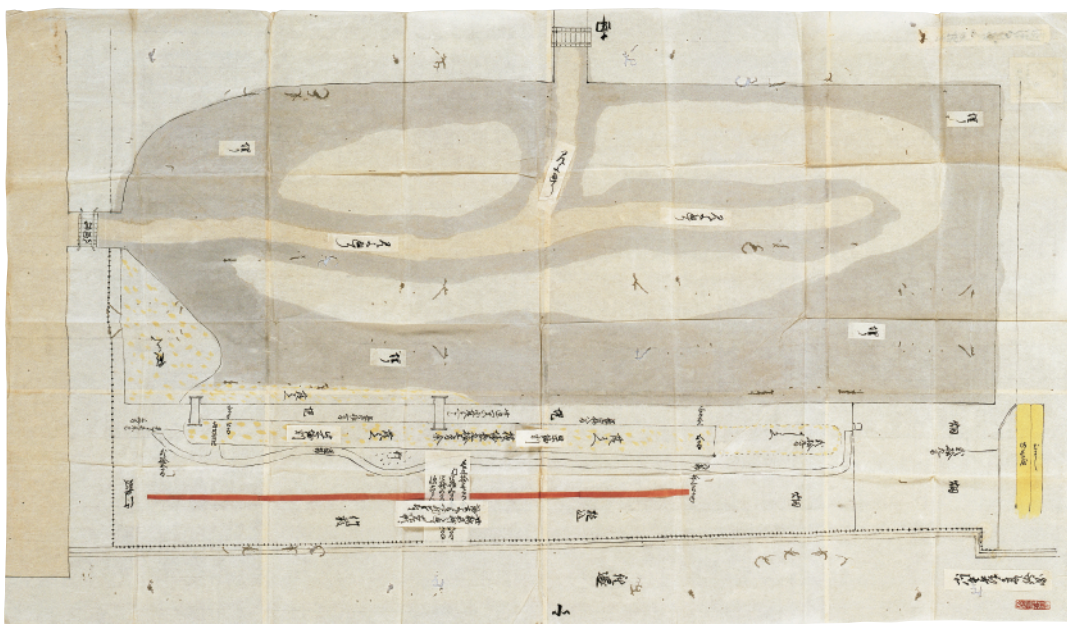


図5-1 木挽町御屋敷絵図 二枚のうち① 名古屋市蓬左文庫蔵

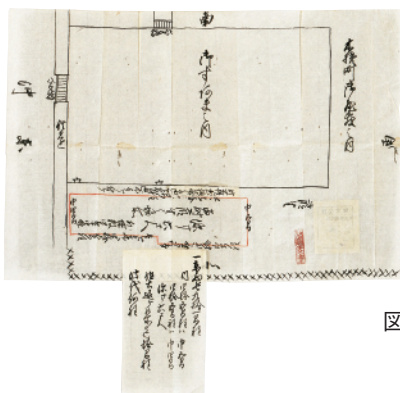


図5-2 木挽町御屋敷絵図 二枚のうち②
名古屋市蓬左文庫蔵

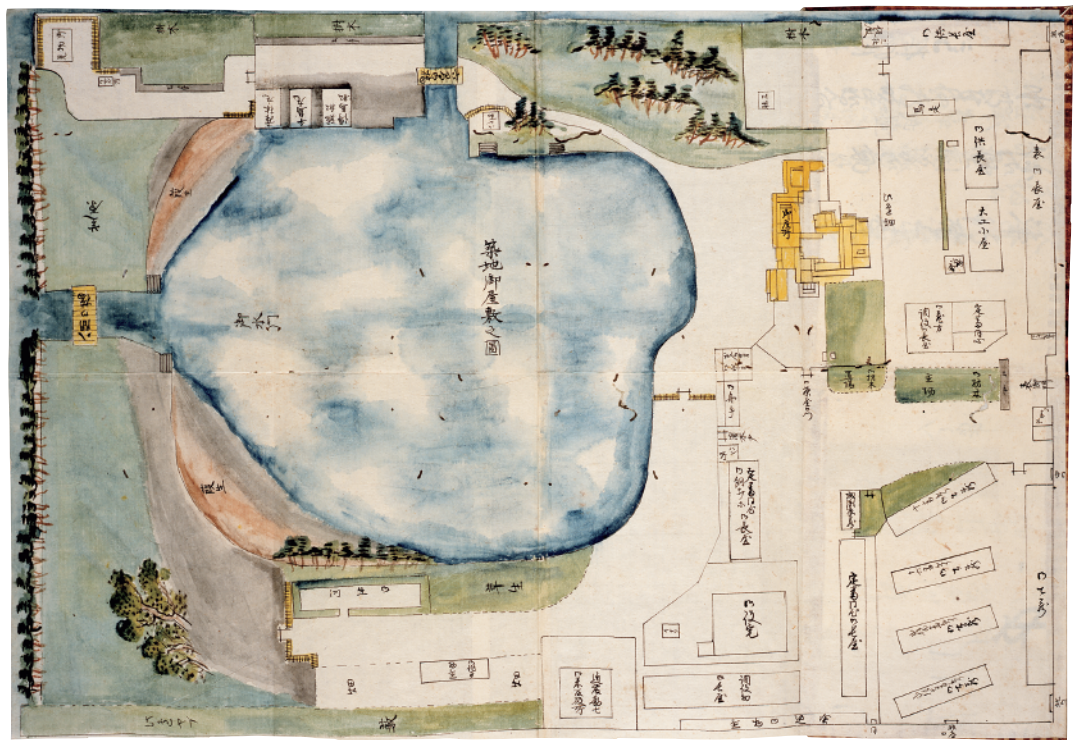


図6 築地御屋敷之図 徳川林政史研究所蔵



図7 築地図巻 アミメキンセンガニ部分



図8-1 築地図巻 アカメガシワ部分



図8-2 築地図巻 キアゲハ部分



図9-1 築地図巻
ミンミンゼミ部分



図9-2 築地図巻
ミンミンゼミ部分



図10 築地図巻 昆虫部分

築地名苑真景草木虫魚図巻について

はじめに

一 作品概要

二 築地蔵屋敷について

(一) 古記録にみる築地蔵屋敷

(二) 絵図にみる築地蔵屋敷

(三) 変遷の検討

三 実景図部分の特徴

四 写生図部分の特徴

五 製作背景

おわりに

はじめに

徳川美術館蔵「築地名苑真景草木虫魚図巻」(以下、「本品」と略称する)は、外題に「築地名苑真景草木虫魚寫生」とあるとおり、木挽町築地に所在し

築地名苑真景草木虫魚図巻について

安藤 香織

た尾張徳川家(以下、「尾張家」と略称する)の蔵屋敷(以下、「築地蔵屋敷」と略称する)の実景図を巻頭と巻末に配し、その間に植物・昆虫・魚介類の写生図を収めた紙本著色の画卷である。

先行研究として、徳川美術館常設展において概要が紹介され、博物学的関心から製作された作品として製作年代を十九世紀とされたのち、特別展「江戸のワンダーランド大名庭園」では、大名庭園における植物の栽培と、江戸時代後期の植物学に対する関心の高まりのなかに本品が捉えられた。⁽¹⁾河田昌之氏は、「特定の地域を対象にした真景図と動植物図巻の性格を兼ね備えた内容を持ち、大名による動植物を対象にした研究活動の実態や殖産興業への関心を知ることができる」とした上で、作者について、「巻末の河口付近に描かれた南画風の樹木などから尾張家に関わる御用絵師で写生図に長じた文人画家が想定でき」ることを指摘した。⁽²⁾吉川美穂氏は、江戸時代後期の尾張家では、同家九代宗睦(一七三二〜九九)の代から幕末に至るまで庭園に関する絵画作品が確認できることを述べ、庭園は大名の最も身近にあった自然であり、庭園に生息する動植物を庭園図とともに描い

た本品には大名の自然への関心を如実に窺えるとした。⁽³⁾ また写生図にみられる描写は博物図譜というべき写実性をもっており、当時の博物学的関心から製作されたと考えられると指摘した。

本品の根底に自然への関心があり、その製作には尾張家に関わる絵師が携わったことに異論はないが、議論の前提として、これまで作品全体が紹介される機会がなかったことを踏まえ、本稿では本品の全体像を提示することを第一義とする。大名の庭園を描いた実景図には一定数の遺例があり、大名の関わる多様な博物図譜も世に知られるなかで、大名屋敷の実景図とそこに生息したと思われる生物の写生図を一つの作品としてまとめた構成は、管見では類例がない。実景図の簡素ながら的確な筆致、写生図の精彩に富む描写も見所であり、本品を通覧することは、絵画史学はもちろん、歴史学や自然科学も含む多くの研究の今後の展開につながると期待される。

加えて、これまで外題を論拠として本品が築地藏屋敷を描いた図であるとされてきたが、改めて築地藏屋敷に関わる資料を概観し、これを確認・補強したい。築地藏屋敷は、明暦三年（一六五七）の大火のあと、被災した八丁堀蔵屋敷に代えて拝領した屋敷である。この大火後、大名家は江戸に複数の屋敷を所持するようになり、上屋敷・中屋敷・下屋敷・蔵屋敷など機能別に整備が進められた。尾張家においても多数の屋敷が営まれ、なかでも当主の居屋敷である市ヶ谷上屋敷、世子の住居である麴町中屋敷、避難所または別邸である戸山下屋敷が中核となった。⁽⁴⁾ この三屋敷については絵図のほか古記録・古文書、関連する文学・絵画作品なども多く残されており、それらの重層的な研究がなされている。一方、築地藏屋敷は関連資料に乏しく、発掘調査も実施されていないためか、安藤菊二氏による要略

が唯一提示されるに留まっている。⁽⁵⁾

本稿では、本品の概要を確認したのち、まず記録や絵図から築地藏屋敷を概説して本品を理解する素地となし、その上で本品の実景図部分・写生図部分にそれぞれ注目して特性を述べ、本品の特徴的な構成が創り出された背景へと論を進めたい。

一 作品概要

本品は卷子装で、紙本著色、一卷からなる。表紙は茶地花鳥文緞子、外題は金切箔散地に「築地名苑真景草木虫魚写生」と墨書がある。小口を金箔押し、見返は切箔散とする。軸首は木製独楽彫、巻紐は紫色である。法量は縦二七・六糎、全長九二〇・二糎、本紙は七枚継ぎで各紙とも長一一八・一糎五厘ないし一三四・一糎からなり、本紙長は計八六〇・一糎である。箱は桐二方棧蓋造で、蓋表に外題と同筆で「築地名苑真景草木虫魚写生御巻物」の墨書があり、蓋裏に「九十四番」「二番拾九番」「二番上五番改」「人八号」（傍線部は朱書を示す、以下同）の貼札がある。

内容は、巻頭に江戸湾側から築地藏屋敷を望む図（挿図1、図1、以下、「屋敷図」と略称する）、巻末に築地藏屋敷側から江戸湾を望む図（挿図1、以下、「江戸湾図」と略称する）が置かれる。いずれの図にも、場所を特定するような墨書・貼札などはない。これらの実景図の間に、写生図が配される（挿図1）。写生図は植物のうち樹木でない、いわゆる草本からはじまる。草本二十九図と菌類一図、続いて木本（樹木類）が十一図、昆虫類が十八図、最後に甲殻類・魚類が二十七図描かれる。部分図や解剖図は用いられず、同種の雌雄が一図ずつ描かれるなど一部の例外を除いて、基本的に一種に

つき一図が採録される。また各生物は、単独で描かれる場合と、複数の個体が有機的に重なり合って描かれる場合がある。いずれの図にも種別などを示す墨書・貼札はない。内容を本紙ごとに見てみると、第一紙に屋敷図と写生図のうち草本・菌類、第二紙に草本・木本、第三・四紙に木本、第五紙に昆虫類と甲殻類、第六紙に甲殻類・魚類、第七紙目に江戸湾図が描かれる。各生物の分類は本紙ごとにおおよそまとめられており、全体の構成に紙継ぎが意識されていることがわかる。

描写・彩色については、実景図はいずれも淡墨の線描を主体とし、近景はもちろん遠景にも部分的に濃い墨色を用いてアクセントとした上、淡彩が施される(図1・2)。全体に筆致は簡潔ながら遠景まで細部を入念に描いており、後述する通り、実景を的確に描写していると思われる。写生図は線描を生かして彩色されるが、植物では没骨法で描かれている部分もある(図3)。賦彩は実景図に比して濃く鮮やかであり、一部に金銀泥も使用される(図4)。

落款印章はなく、明確な製作者・製作年代は未詳である。

本品の伝来については、江戸時代以来、尾張家で使用されてきた什宝の管理台帳(以下、「蔵帳」と呼称する)が参考になる。管見の限りによれば、本品の情報が掲載された最初の蔵帳は「明治元辰年東京廻 御手鑑 御巻物 雑図類 書拔 三冊之内 御道具掛」(以下、a「明治元年東京廻書拔」と略称する)であり、残念ながら江戸時代に遡る記録はない。

a「明治元年東京廻書拔」は、各種帳面・蔵帳を合綴した「御什器二関スル参考書類」(什器古帳四十三号)三冊のうちに収録される、手鑑・巻物・絵図などの目録であり、江戸表で管理されていた道具が、江戸時代末期から明治時代初期にかけて名古屋へ移管されたのち、番立てを改める前に編

纂されたとみられる。⁽⁶⁾ 本品については次のように記録される。

五十一番

箱入

御側上り 一 築地名園真景艸木虫魚写生 壹巻

〔付箋〕
「大納言様御側
巳六月」

「巳六月」は本目録の編纂された翌年、明治二年(一八六九)を指すと考えられる。またこの時、大納言であるのは尾張家十四代慶勝(一八二四～八三)である。すなわち、尾張家における江戸時代末期から明治時代初年にかけて行われた什宝整理を契機に、⁽⁷⁾ 当時の当主・十六代義宜(一八五八～七五)の後見をしていた慶勝により本品が見出され、御側御道具にされたとわかる。その後、明治六年には名古屋から東京へ再度移管されている。⁽⁸⁾

二 築地藏屋敷について

(一)古記録にみる築地藏屋敷

まずは先行研究である安藤菊二氏の論考を含め、古記録を手掛かりに、築地藏屋敷の概要を述べていく。⁽⁹⁾

尾張家はもと八丁堀に蔵屋敷を所持していたが、明暦三年(一六五七)正月、大火により類焼した。それに替えて同年五月二十七日、木挽町築地に屋敷地を拝領し、以後、明治三年(一八七〇)四月二十九日の土地まで、尾張家蔵屋敷として用いた。敷地は、拝領時には「内堀際南北石垣通りまで」で、数年でさらに拝領して南方「八間御水門」まで築き立て、二万七千二百五十八坪となったという。⁽¹⁰⁾ 万治三年(一六六〇)末頃成立とさ

挿図1 築地図巻 全図 徳川美術館蔵(画像上下の算用数字は表1の仮番号を示す)



1

屋敷図 第一紙

築地名苑真景草木虫魚図巻について

26

25

23



27

24

22

21

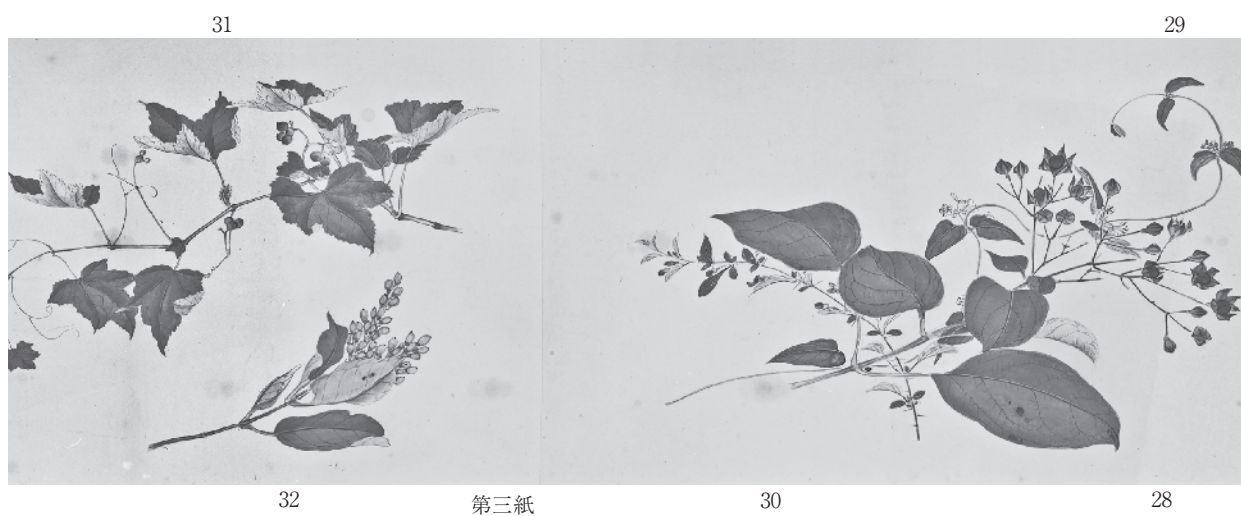
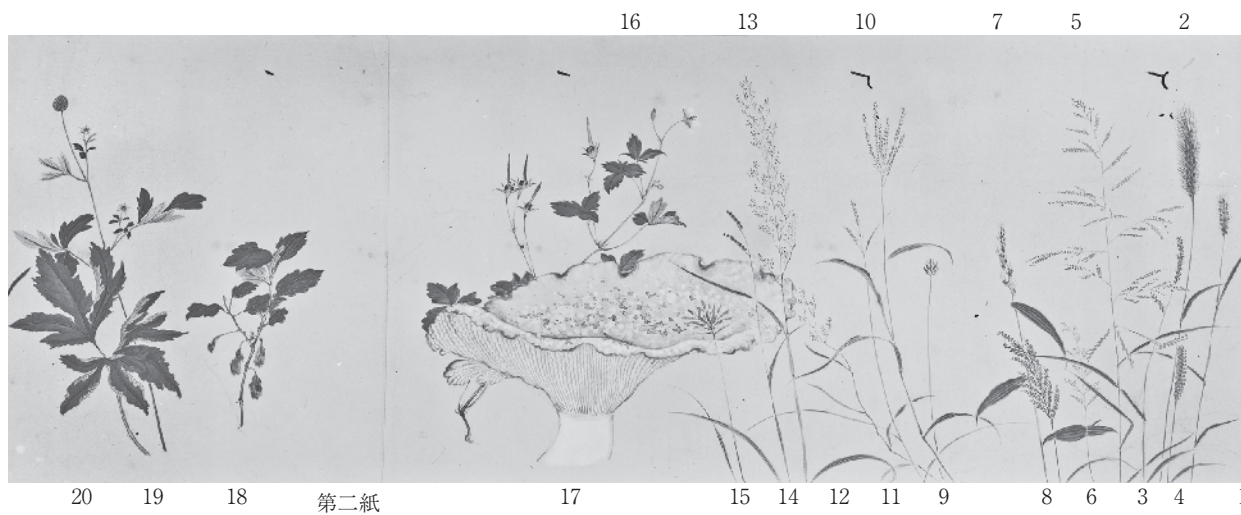


35

34

33

八八





4 45 第五紙

41

40

39

69

67

64



70

71 72

第六紙

65

66

63



江戸湾図

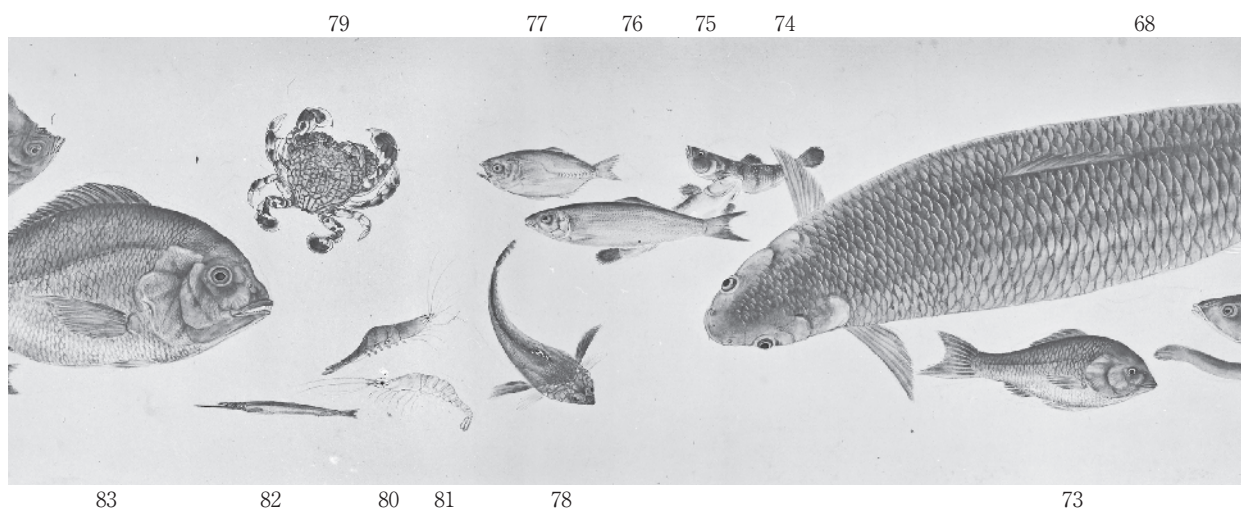
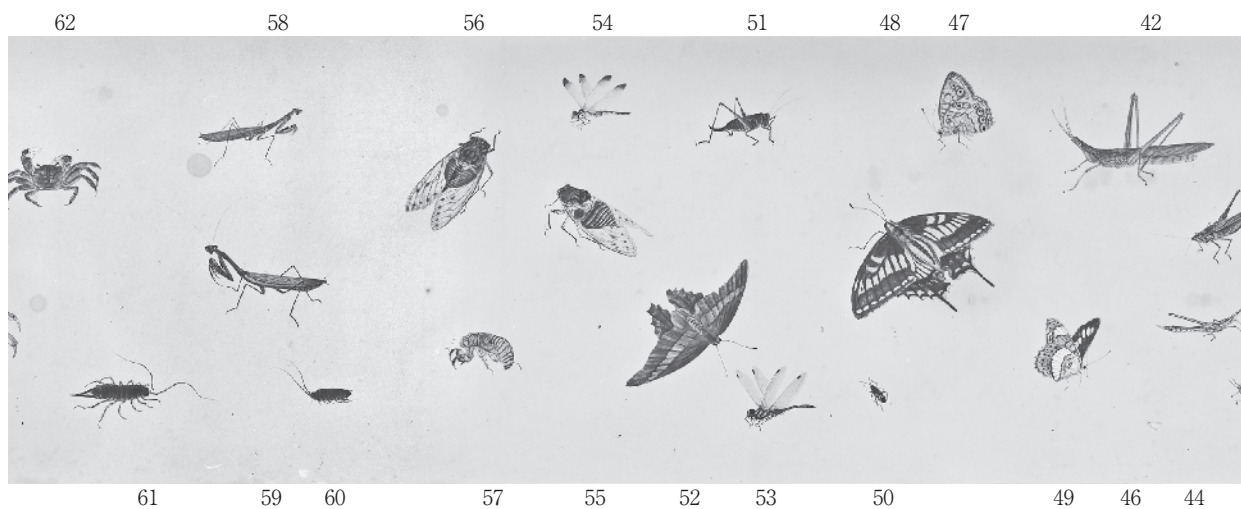
第七紙



85

84

86



れる「江戸大絵図」(香川県立ミュージアム蔵)では未だ敷地は狭いため、この後に築き立てられたのだろう。その後、宝永四年(一七〇七)の土地により二万四千六百八十一坪となるが、寛保二年(一七四二)には浜通りに三千七百八十四坪を拝領して総計二万八千四百六十五坪になった。

築地藏屋敷は、はじめ木挽町築地の「築地」を省略して「木挽町御屋敷」と呼称され、木挽町御屋敷奉行が統括していた。¹¹寛政五年(一七九三)に「江戸木挽町邸を改め、築地邸」と称されることになり、同十二年から慶応四年(一八六八)にかけては「築地御屋敷奉行」の役職名が継続して確認できる。なお築地藏屋敷には御蔵奉行も置かれたが、享保十一年(一七二六)には廃され、以後、尾張の御蔵奉行が交代で江戸詰に任じられるようになった。

築地藏屋敷の主たる用途は、江戸・尾張間の運送品の積み下ろし、米穀・材木の貯蔵、国許からの産物の取り捌きであった。¹³これは次に取り上げる絵図B「築地御屋敷図」に米取扱所や材木置場があることからわかる。米取引については、江戸へ廻送してきた米穀の一部を、切手を使用して売り払い始めた文政六年(一八二三)から同十二年まで、築地藏屋敷が取引の舞台であったことが知られている。¹⁴

また築地藏屋敷は、藩主の遊興の場としても機能していた。十八世紀中期以降に成立した「江戸御屋敷便覧」(徳川林政史研究所蔵)には、屋敷内の畑について、五十六坪余り(年貢にして銀三匁八厘分)は当主の在府中には「鴨打場」となると記されており、築地藏屋敷が鴨場としても使用されたとわかる。また当主に近侍する御小納戸方の記録「江戸御小納戸日記」(徳川林政史研究所蔵)からは、藩主やその家族による御成があつたと知られ、夏季には築地藏屋敷で漁獵を行ない、獲った魚は尾張家の縁者や懇意の人物に

進ぜられ、將軍家への献上品にされることもあつたとわかる。¹⁵

以上の用途に加え、江戸時代末期には築地藏屋敷が軍備強化にも役立てられた。尾張家十四代慶勝が編纂した「諸品新聞書」(徳川林政史研究所蔵)には、八間橋を含む江戸湾側の石垣周辺の部分図が貼り込まれており、八挺の筒を新調し、砲台を設置しようとする旨が記入されている。¹⁶成立時期は未詳だが、嘉永六年(一八五三)のペリー艦隊来航の後、諸藩に適宜砲台の設置が命じられたため、この頃の図と推察される。¹⁷

屋敷内の構造・建造物について、「江戸御屋敷便覧」によると、拝領の頃から「内堀」「石垣」「八間御水門」の記述があり、また延宝八年(一六八〇)の大風で倒壊した「御殿」、寛保元年完成の「御茶屋」、御大切御長持四棹を納めていた「証文蔵」、「御蔵」六棟、貞享二年(一六八五)完成の「竹腰山城守米蔵」一棟、享保六年完成の「成瀬隼人守米蔵」一棟、ほかに畑や上水道・井戸などの施設があつたことがわかる。¹⁸その後、安政二年(一八五五)の大地震に際して尾張家から提出した被害報告には、「茶屋」「土蔵」「長屋」「門」「稽古小屋」「高塀板塀」「矢来」「船小屋」「辻番所」「番屋」「物置」「橋」「井戸」「石垣」などの被害が箇条書きで報告されており、各建造物の存在が確認できる。¹⁹なお、「橋」については「橋刎木」の損害も記されていることから、後に述べるように刎橋であることが判明する。ほかに災害の記録として、元禄八年(一六九五)十二月・天明四年(一七八四)十二月・文政十二年(一八二九)三月の火災が史料に残されている。

(二) 絵図にみる築地藏屋敷

次に、絵図二例によって建造物の配置や、时期的な特徴をみていく。

A 「木挽町御屋敷絵図」(図5、名古屋市蓬左文庫蔵)

屋敷南東部の、海水が出入りする汐入の舟溜(以下、用途の変化に関わらず便宜的に「舟溜」と呼称する)部分を扱った絵図二枚である。法量は①縦六三・二糎、横一〇九・〇糎(図5-1)、②縦二七・八糎、横四一・〇糎(図5-2)である。①には「小川重平治る来候絵図」と墨書された貼紙があり、小川重平治は、文政三年(一八二〇)五月二十四日から天保三年(一八三二)四月二十二日まで築地御屋敷奉行を務めていることから、この間に重平治より藩へ提出された図と推定される。舟溜北側に黄の点描を打ち「葎はえ」と示された区域のうち、「堤」を隔てて「長九拾一間余」(約一六六米)、幅「四間」ないし「五間」(約七・三〜九・一米)が囲われ「此所堀割」と貼紙があり、同様の法量に「深六尺」(約一・八米)を加えた貼紙が付される。また赤い紙紐で示された場所には「此桃色紙之通り土居形三堀土上ヶ候而可然奉存候」とあり、掘った土を土居形に盛り上げる提案がなされている。以上から、本図は舟溜の北に堀を掘削する計画書であるとわかる。

②は「木挽町御屋敷之内」と墨書があり、①と同様に舟溜の部分のみ図示される。①の掘削予定地が朱線で囲われ、周囲に①と同様の長さと同幅、中に深さと「当時葎生之場所」「凡坪数四百十四坪」という墨書がある。ここに、同様の法量とともに「但土退ヶ候所迄拾間程 此代何程」と墨書された貼紙が付されており、堀掘削の代金を尋ねるように読めることから、計画段階の①の付図と考えられる。いずれも掘削の目的は未詳である。

二図を同時期の成立とみて建造物を追っていくと、舟溜の東側には江戸湾に面した船の出入り口があり、「八間橋」①②とも墨書あり。八間は約十四・五米)が架けられている。また屋敷南側には水路を隔てて將軍家の浜

御殿があり、この水路への出入り口には「六間橋」②が架けられている。

二図が作成された時、②に「御すあまの内」とあるように舟溜はかなり干上がった状態で、①では周縁部に薄墨が掃かれ「埋り」の貼紙がある。一部に「みよ通り」と貼紙があり、「みよ」とは「滯」の転訛とみられ、辛うじて船の通れる深みが残されていたと考えられる。また盛土の予定地は「竹藪」「植込」とあり、「畑」が作られ「むさし御長屋」なる長屋があったことも判明する。

B 「築地御屋敷之図」(図6、徳川林政史研究所蔵)

築地蔵屋敷全体を扱った絵図で、法量は縦三七・〇糎、横五三・七糎、尾張藩大道寺家の用人・水野正信の旧蔵である。建造物などは図示され、樹木は絵で表されて舟溜や草叢とともに彩色が施される。築地蔵屋敷は北西から南東にかけて長い長方形の敷地で、例えば嘉永二年(一八四九)の尾張屋清七版「増補改訂築地八丁堀日本橋南之図」(国立国会図書館蔵「江戸切絵図」のうち)でもそのように示されるが、「築地御屋敷之図」では長辺が詰まっており、舟溜の形状も円形に近く、比率に問題があると思われる。とはいえ、屋敷西部の建築群はもちろん、屋敷全体の様子が具体的にわかるため貴重である。

製作時期については、舟溜南側にある「千鳥丸」と記された船小屋から絞り込める。「嘉永四年亥九月尾藩御船奉行 御船由緒書」(徳川林政史研究所蔵)によると、千鳥丸は元和六年(一六二〇)に二十四挺立の関船を御座船として取立てたのに始まり、一度廃船となったが、弘化元年(一八四四)に築地蔵屋敷の御召船として十二挺立の小早船を取り立て、新たに千鳥丸と名付けたという。また先の「諸品新聞書」所収絵図により嘉永六年頃には

砲台の設置があったと思われるため、本図の製作時期は弘化元年から嘉永六年頃までの間であることがわかる。

施設としては、屋敷南西側の「御座所」が黄で着彩され他と区別されており、塀と「御茶屋御門」で区画されていることからしても、江戸湾を見渡せる尾張家当主のための空間と察せられる。このほか、御座所に隣接して屋敷内に勧進された「三社」があり、御座所背後に「表御長屋」「御供長屋」「大工小屋」「馬走」「定番同心」「御蔵方調役御長屋」が設置され、「畑」もある。屋敷西側の中央には「御番所」が付属する「表御門」が設けられ、屋敷へ入るとすぐ「御材木置場」があり、舟溜に抜ける「濱木戸」付近には「ハン所」「定番同心御網打所御長屋」「御舟手」「出入御中間御水戸」と記された建物があり、舟溜の畔(浜)には御座所方面との境に矢来と木戸とみられる門が設けられている。表御門から北西部にかけては五棟の「御土蔵」と、「成瀬殿土蔵」「定番同心御長屋」「イナリ」のある「御役宅」「調役初御長屋」「塗込御物置」「近藤勘七御米取扱所」がある。ここから舟溜を回遊するようにみていくと、舟溜北側の区域はA「木挽町御屋敷絵図」でも畑があった場所、引き続き「畑」が作られているほか、「御作事物置」「御生洲」があり、「草生」「藪」なども示されて、さらに東側の「八間橋」方面との境には矢来と木戸とみられる門がある。「八間橋」の周辺は「芝原」で、南東隅には江戸湾に面した「御物見」が設置され「御ゼン所」があり、そこから屋敷南側の舟溜の岸には先に述べた船小屋三棟があり、それぞれ「舜林丸」「千鳥丸」「鯨船伝馬船」と記されている。²⁰その先に六間橋があり、「ハン所」が設けられ、御座所の前へ到達する。舟溜の様子はA「木挽町御屋敷絵図」とは異なり、満々と水をたたえ、御座所の前の水際は曲線を描いており、実用目的の舟溜からいわゆる庭園の御

泉水へと用途が変更されたようにも見受けられる。⁽²¹⁾

(二) 変遷の検討

以上の古記録・絵図から築地藏屋敷の特性と盛衰について時系列に沿って整理しておく、まず築地藏屋敷は明暦三年(一六五七)の拝領後、数カ年で整備され、舟溜(内堀)とともに八間橋(八間御水門・八間御橋)を構える構造になり、当初から運送品の積み下ろしを目的として屋敷内部へ舟を引き入れられるよう設計されていたことがわかる。

主要な建築であった当主の御座所(御殿・御茶屋)に注目すると、御座所は延宝八年(一六八〇)の御殿倒壊から寛保元年(一七四一)の御茶屋建設まで、記録の上では約六十年間再建がなされなかったようである。宝永四年(一七〇七)の土地による屋敷地縮小も考えると、十七世紀後期から十八世紀前期頃には築地藏屋敷の利用が縮小ないし停滞していたと推察される。その後、御茶屋建設の翌年には拝領により屋敷地が最大になるため、寛保年間(一七四一～四四)は築地藏屋敷の再開発の時期であったとみられる。ただし八代当主宗勝(一七〇五～六一)のもと、同時期の戸山下屋敷は庭園としての機能が衰退していたと指摘されており、⁽²²⁾築地藏屋敷におけるこの再開発も、庭園としての整備というよりは蔵屋敷としての実用的な側面から行われたと察せられる。

続く十八世紀後半から十九世紀初期の間の変遷は未詳である。文政六年(一八二三)から築地藏屋敷にて行われた米取引は、同十二年には蛸殻町屋敷に移され、文政三年から天保三年(一八三二)間のある時期には舟溜の大部分が埋まっていたなど、この頃には管理が手薄になっていたと想像される。その後、いつの時点かに屋敷全体の再生が企図され、弘化元年

(一八四四)から嘉永六年(一八五三)頃には「築地御屋敷之図」に見られるような状態になった。この時の整備は、舟溜の水際が曲線を描く形状に変更されて庭園の御泉水という側面が付加されたり、江戸湾を見渡せる御物見が出来たりと、娯楽的な要素が加味されており、庭園として開発が進んだと捉えることが可能である。

天保年間(一八三〇～四四)以降は異国船来航に対して江戸湾の防備が段階的に強化されていく時期で、特に嘉永六年のペリー艦隊来航の後、内海防備のために品川台場が築かれ、諸藩に適宜砲台の設置が命じられ、築地蔵屋敷に隣接する浜御殿にも砲台が設置された⁽²³⁾。先のとおり築地蔵屋敷にもこれを受けて砲台が設置されたと考えられ、幕末に向けて軍事的な目的での使用が増加していったとみられる。

以上、築地蔵屋敷について概観してきた。これを踏まえ本品の具体的な考察に移りたい。

三 実景図部分の特徴

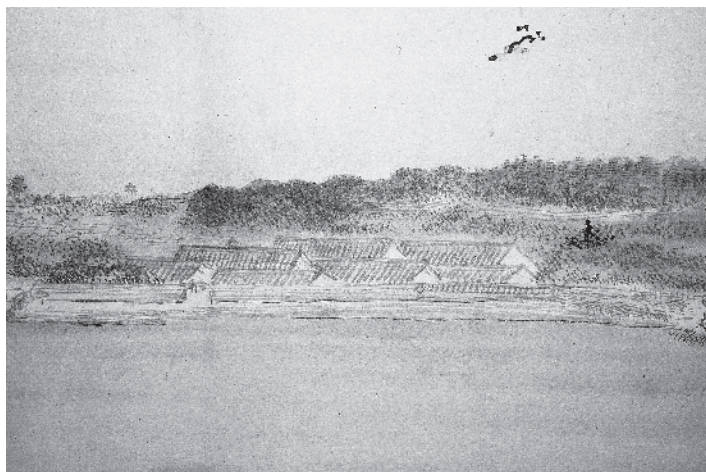
実景図を検討するにあたり、まずは第二章を踏まえ、本品がどの程度の再現性を備えているか検討したい。

屋敷図の画面下端中央に描かれるのは、江戸湾に面した八間橋である(図1、挿図2)。石垣に刎木を掘り込み、その上にさらに刎木を組んでアーチ状とすることで橋脚を用いることなく架けられる刎橋形式で、江戸時代には中部山岳地帯を中心に、橋脚の立て難い溪谷などに使用されたという⁽²⁴⁾。橋の袂には長柄の玉網らしき品や、提手の付いた桶が置かれ、四手網が仕掛けられ、側に船が描かれている。八間橋から画面奥に向かっては汐入の

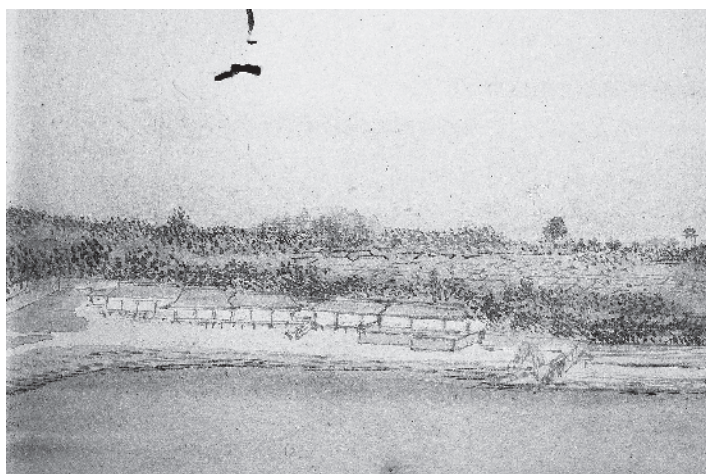
舟溜が広がり、対岸の右手には長屋や土蔵、左手には木戸を隔てて御座所などがある(挿図3)。御座所から左手前に目をやると、畔には屋形付きで旗を揚げた三艘の小型船と、屋形のない船数艘が泊まっており、建物も二棟確認できる。その先、鬱蒼と繁る木々に阻まれてはいるが、左手奥へ水が引き込まれていくようにみえる。これは屋敷南西にあった浜御殿側への出入り口、六間橋への流れを表しているであろう。なお画面の右側(屋敷北東側)には水路を挟んで稲葉家や久松松平家の屋敷があったが、こちら側も藪や樹木が生い茂って敷地の境目がわからないうほどである。続いて遠景にも目を向けておくと、画面右奥には三層の櫓一棟と、構造は判然としないう櫓二棟、計三棟が描かれる(挿図4)。築地蔵屋敷から北北東の方角にあたるため、江戸城の一部と推察される。長屋・土蔵の奥に



挿図2 築地図巻 屋敷図 八間橋部分



挿図3-1 築地図巻 屋敷図 土蔵部分



挿図3-2 築地図巻 屋敷図 御座所部分



挿図4 築地図巻 屋敷図 江戸城部分

は堀で囲われた屋敷地が描かれ、御座所の奥にかけて建物の屋根が並び、火の見櫓もみえる。

巻末の江戸湾図は本紙一紙分をあて、屋敷図に比べて紙幅を長くとしており、広々とした湾内の様子が描かれる(挿図1)。画面右下には巻頭にも登場した八間橋があり、四手網の仕掛けなども描かれている(挿図5)。橋の右側、石垣上には防風林に適した松が海に面して一列に植えられており、左側は松葉を表現する樹上部が描かれるのみではあるが、同様であつ

たと推される。そのまま視線を左に移していくと、画面左端には築地蔵屋敷よりも海(南東側)へ一段突き出している浅野家の屋敷地の一角がみえる。近海には帆柱のない小型船や白い帆をあげた船が行き交っている。築地蔵屋敷から浜御殿のある南西側にかけては、享保二年(一七一七)に浜御殿の海岸前から二町(約二八米)ほどの海域が禁漁区域となり、それを示すために立てられていた杭が並んでいる⁽²⁵⁾。画面右手奥には三浦半島、中央から左手にかけては房総半島を遠方に望む構図で、その境目は外洋への出



挿図5 築地図巻 江戸湾図 八間橋部分

入り口にあたるため、この付近の海上には帆を畳んで停泊する無数の大型船が描かれている。以上のように、絵図や記録、実際の地理・地形などを考え合わせると、屋敷図・江戸湾図とも、遠景に至るまで入念に描写され、概ね実際の地形との一致が確認できた。

次に構成にも目を向けておきたい。江戸湾図は屋敷図に比して本紙一紙分を充て長く画幅を取り、広角的な視野を再現するように製作されている。これは、作庭家としても知られる松平定信（一七五八―一八二九）の名園・浴恩園や、將軍家の浜御殿が所在したように、築地が江戸湾を望む風光明媚な地と認識されていたことを反映していると考えられる。また画中に人物が描かれない中で、両図にみられる漁猟の道具は唯一、人の気配を感じさせるモチーフであり、鑑賞者の目を引く。先に述べた通り、築地蔵屋敷では漁猟が行われ、釣果を献上することもあった。隣接する浜御殿でも釣りは恒例の娯楽であり、沿岸に位置する屋敷にとって漁猟は自慢すべき遊興で、他にない特色と認識されていたのだろう。すなわち本品においては、漁具により漁猟を象徴的に描くことによって、築地蔵屋敷の魅力を強調する意図があったと考えられる。このように本品は、その構成全体から築地蔵屋敷を賛美する意識、言い換えれば、題名のとおり「名苑」を描く意識のもとで製作されたことが判明する。

さらに八間橋に注目してみると、屋敷図・江戸湾図とも八間橋から陸・海を見渡す構図をとっている。八間橋は、先に確認したとおり築地蔵屋敷の建設当初から存在し、各資料・絵図でも必ず記名されるように、多数ある建造物の中でも代表格とみなされていたことは明らかである。刎橋という中部地域の山間部を中心に利用された橋脚のない形式であることを考慮すると、この橋は木曾を有する尾張家築地蔵屋敷の主たる見どころであっ

たと推察される。今橋理子氏は、庭園は名所に見立てられることにより、初めて名所・名園と化すこと、そして名所化されるためには、詩文に読まれ、絵画化されることが必須であったことを論じた。⁽²⁷⁾その上で、名もなき実景としての大名庭園の、写実的描写による絵画化は、新しい名所絵の創出であることも指摘している。本品において八間橋は、築地蔵屋敷の見どころとして重点的に扱われており、本品実景図を「新たな名所絵」の創出とみて、そこに築地蔵屋敷を名園となす目的を看取することも可能であろう。

本品は、先にみたとおり実景に即して遠景に至るまで入念に描写されており、霞によるモチーフの省略もしていない。また水平線の中央寄りの位置に向けて視線が集中するよう、近景から遠景にかけて、モチーフの配置や描き方に合理的な配慮がなされている。このように省略を控え、合理性を備えた描写は、関東画壇における実景図・庭園画のキーパーソンであった谷文晁の作例に通じるところがある。今橋理子氏・鶴岡明美氏らによると、文晁が寛政五年（一七九三）に海岸防備を目的とした巡見で実見した景観を描いた「公余探勝図」（東京国立博物館蔵）は、西洋由来の遠近法・陰影法・構図などを複合的に駆使して写実性・迫真性に富む描写を確立した画期的な作例で、文晁によるその後の庭園画にも同様の画法が適用されることが指摘されている。⁽²⁸⁾さらに野田麻美氏は十九世紀の関東画壇における庭園画について、江戸狩野派の伝統様式と文晁一派の新様式の混交により厚みと広がりのある展開になり、立原杏所・沖一峨・宋紫岡（楠本雪溪）・長谷川雪堤など様々な画家が庭園画を製作するに至ったことを論じた。⁽²⁹⁾本品実景図についても、こうした十九世紀関東画壇における庭園画の展開のなかに位置付けるのが妥当であろう。⁽³⁰⁾

同時期の尾張家における庭園画に注目すると、すでに狩野典信筆「戸山

御庭十景」・狩野惟信「戸山莊八景図巻」を所持していたにもかかわらず、寛政十年（一七九八）文晁に命じ戸山下屋敷を描かせたほか、紫岡筆「楽々園四季真景図巻」（名古屋博物館蔵）や雪堤筆「市ヶ谷邸庭園之図風炉先屏風」（徳川美術館蔵）なども製作させている。この状況について薄田大輔氏は、狩野派の庭園図とは異なる役割を期待して、尾張家周辺でも記録性・実利性を追求した新たな庭園図が求められたと指摘しており、本品実景図の特徴からしても、こうした尾張家内での需要を背景に、記録性が重視されて製作されたと考えられよう。

四 写生図部分の特徴

続いて写生図部分の考察に移りたい。第一章で概観したとおり、本品には多様な生物が描かれるが、いずれの図にも種別などを示す墨書・貼札はない。そのためこの度、植物類には名古屋城総合事務所、昆虫類には小野知洋氏を代表とする諸氏、魚介類には名古屋港水族館の協力を得て同定を試みた。⁽³²⁾本章ではこの結果をまとめた表1を頼りに論を進めていくが、まずは全体として、描かれた生物は概ね関東沿岸部（汽水域を含む）で見られる種に割り当てることが可能であること、季節としては夏季を想定できることを記しておく。

写生図の構成から考察を始めるにあたり、江戸時代の本草学の基礎文献として中国・明時代の李時珍著『本草綱目』の構成を確認しておきたい。万暦十八年（一五九〇）に初版が刊行された『本草綱目』は、それまでの本草書から格段の飛躍となる約千九百種を取り上げて分類した上、名称・産地・形態・薬効・処方例などを記述した書籍で、慶長九年（一六〇四）以前

表1 築地図巻写生図における生物の名称推定結果一覧

草本・木本・菌類

仮番号	推定名称	目・科	備考
1	キンエノコロか	イネ科	
2	チカラシバか	イネ科	
3	エノコログサ	イネ科	
4		イネ科	ヌメリグサまたはエノコログサの一種か
5	トダシバか	イネ科	
6		イネ科	コササキビに似るが分布が異なる
7	アズマガヤか	イネ科	
8	イヌビエか	イネ科	
9		カヤツリグサ科か	
10	メヒシバ	イネ科	
11			スゲ属の仲間か
12	ヌカキビか	イネ科	
13	カゼクサか	イネ科	
14	スズメノヒエか	イネ科	
15	カワラスガナか	カヤツリグサ科	
16	ゲンノショウコ	フウロソウ科	
17	ハツタケか	ベニタケ科	
18		キク科か	
19	キツネノボタン	キンボウゲ科	
20	キツネノボタン	キンボウゲ科	
21	ジャノヒゲ	キジカクシ科	
22	ジャノヒゲ	キジカクシ科	
23	メドハギ	マメ科	
24			
25	ヤマホロシまたはヒヨドリジョウゴ	ナス科	
26	メハジキ	シソ科	
27			
28	カガイモまたはヘクソカズラ	キョウチクトウ科またはアカネ科	
29	クサギ	シソ科	
30	クコ	ナス科	
31	ノブドウか	ブドウ科	ノブドウに似るが実際より葉裏が白い
32	ネズミモチか	モクセイ科	ネズミモチに似る
33	ミズキか	ミズキ科	
34	エノキか	アサ科	
35	マユミか	ニシキギ科	マユミの実に似るが葉が対性に描かれていない
36	ユズリハか	ユズリハ科	
37		スグリ科	葉はスグリ、実はヤシャビシャクに似る
38	トベラか	トベラ科	実際より葉の先を尖らせて描く
39	カナメモチか	バラ科	葉の縁に違いがある
40	シロダモか	クスノキ科	
41	アカメガシワか	トウダイグサ科	アカメガシワの葉脈はこれほど3本の葉脈がめだたないと思われる

昆虫類

仮番号	推定名称	目・科	備考
42	ショウリョウバッタ(雌)	バッタ目	
43	クサキリ(雄 褐色型)	バッタ目	
44	ショウリョウバッタ(幼虫 褐色型)	バッタ目	
45	ヤマトフキバッタ	バッタ目	
46		チョウ目ヒトリガ科またはメイガ科か	
47	サトキマダラヒカゲ	チョウ目	
48	キアゲハ	チョウ目	

49	イチモンジチョウ	チョウ目	
50	ヒメホシカメムシ	カメムシ目	胸部の模様に疑問があるが、体形・体長から判断
51	コバネヒメギス(雌)	バッタ目	ヒメギスの幼虫である可能性もあるが、産卵管の形状から判断
52	アオスジアゲハ	チョウ目	
53	マイコアカネ(雄)	トンボ目	体色や、第一側縫線上の黒条が上方で分岐することから判断
54	マユタテアカネ(雌 翅端褐色班型)	トンボ目	第一側縫線上の黒条のパターンから判断
55	ミンミンゼミ(雄)	カメムシ目	
56	ミンミンゼミ(雌)	カメムシ目	
57	セミ幼虫(ミンミンゼミか)	カメムシ目	またはアブラゼミか
58	コカマキリ(雄 緑色型)	カマキリ目	
59	コカマキリ(雌)	カマキリ目	

甲殻類・魚類

仮番号	推定名称	目・科	備考
60	フナムシ	ワラジムシ目	脚や尾肢の一部が脱落していると思われる
61	フナムシ	ワラジムシ目	脚や尾肢の一部が脱落していると思われる
62	ハマガニ	モズクガニ科	
63	アシハラガニ	モズクガニ科	
64	アカテガニ	ベンケイガニ科	
65	アカテガニ	ベンケイガニ科	
66		モズクガニ科	イソガニの仲間か
67		モズクガニ科	イソガニの仲間か
68	メナダ	ボラ科	
69		ボラ科	ボラの仲間か
70	マルタ	コイ科	実際より背ビレ基底の長さが長く描かれている
71	ウナギ	ウナギ科	
72	ウナギ	ウナギ科	
73		スズキ目か	ウミタナゴに似る
74		ハゼ科か	
75		ハゼ科か	
76	コノシロカ	ニシン科	背ビレ後端の延長部分が描かれていない
77	マアジ	アジ科	第一背ビレ欠落、尾柄の形状など実際と違いがある
78	ネズミゴチ(雄)	ネズッポ科	
79	アミメキンセンガニ	キンセンガニ科	
80			シバエビに似るが、鉗のある脚が長く延長するのはテナガエビ(雌)の特徴
81	シラタエビか	テナガエビ科	実際と異なり目の手前側にも棘が描かれる
82	サヨリ	サヨリ科	
83	クロダイ	タイ科	
84	イシガレイ	カレイ科	
85	イシガレイ	カレイ科	
86		コイ科	フナ仲間か

- 凡例 ・ 同定が困難な場合、「推定名称」は空欄とし、絞り込みが可能な場合には「目・科」欄、その他所感等は「備考」欄に記載した。
- ・ 種別同定の協力者は下記の通りである。なお仮番号60・61については、昆虫類および甲殻類・魚類の協力者いづれからも意見を頂戴した。
- 草本・木本・菌類 名古屋城総合事務所
- 昆虫類 責任者：金城学院大学名誉教授・小野知洋氏、意見聴取：元金城学院大学講師・森勇一氏、栄徳高校教諭・水野利彦氏、名古屋昆虫同好会・間野隆裕氏、北海道教育大学名誉教授・生方秀紀氏、鳥取大学教授・唐澤重考氏、広島大学准教授・富川光氏、鳥取県山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館・太田悠造氏
- 甲殻類・魚類 名古屋港水族館

に日本にもたらされ、江戸時代を通じて本草学・博物学に大きな影響を与えた。⁽³³⁾『本草綱目』は、諸物を水部・火部・土部・金石部・草部・穀部・菜部・果部・木部・服器部・蟲部・鱗部・介部・禽部・獸部・人部の順で分類し掲載する。

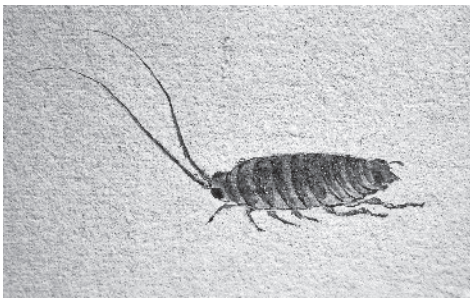
以上を踏まえて本品の構成をみるに、まず、各生物は植物(『本草綱目』草・穀・菜・果・木部)・昆虫類(『同』蟲部)・甲殻類・魚類(『同』鱗・介部)と大まかに分類されており、さらに植物を草(『同』草部)と樹木(『同』木部)に分け、甲殻類・魚類では蟹(『同』介部)とその他の魚や海老(『同』いずれも鱗部)とを分けて描いている。また草からはじまる収録順序も『本草綱目』に通じるところがある。従って本品は当時の本草学における基礎的な分類方法をもとに構成されていると言えよう。ただし表1の仮番号17「ハツタケ」(『同』菜部)が草本(『同』草部)に混在する形で描かれることや、仮番号79「アミメキンセンガニ」(『同』介部)が他の蟹とは異なり魚類(『同』鱗部)



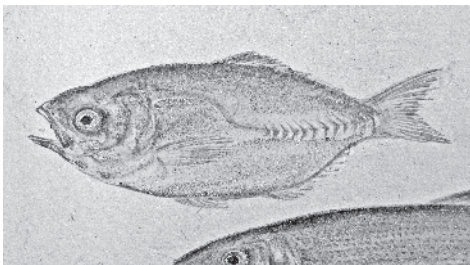
挿図6 築地図巻 マユミ部分



挿図7-1 築地図巻 フナムシ部分



挿図7-2 築地図巻 フナムシ部分



挿図8 築地図巻 マアジ部分

に混在するように描かれることからして(図7)、本品において分類順に並べることは絶対的な法則ではないようである。

次に各図の描写をみてみると、種別同定の協力者からは、正確性にやや難があり、断定が困難な図が多いとの所感が示されている。各協力者の見解は表1を参照していただきたいが、いくつか取り上げておくと、仮番号35は「マユミ」と思われるが、同一節上に二枚一対で葉がつく対生で描かれておらず(挿図6)、仮番号60・61の「フナムシ」は脚・尾脚が一部描かれず(挿図7)、仮番号77の「マアジ」は第一背ビレが描かれていない(挿図8)。

現代の生物学の状況と、江戸時代の本草学・博物学の状況との差異を考慮する必要があるが、その上で本品については、専門的な知見を絵図によって表した本草学・博物学者の関わる図譜とは性質が異なる、と考えたい。すなわち製作者は、本草学・博物学が価値を置く「対象のあるべき

姿」、すなわち各生物の特徴をわかりやすく示すための図を描いたのではなく、見たままを描いたと解釈したのである。先に挙げた描写の不足についても、例えば、「フナムシ」の脚・尾脚は乾燥すると脱落しやすいため、本品を描くにあたり参照した個体の脚が脱落していた可能性は大いにあり、「マアジ」についても、参照した個体の背ビレが畳まれていたと想定することは難しい。本品製作の主眼は、本草学・博物学的な観点ではなく、対象を見ることによって得た知見の表現に置かれていと捉えられるのである。その傍証として、本草学・博物学は情報を集積していく学問であるため図譜には他書からの転写が多く見受けられ、例えば高松松平家五代頼恭による『衆鱗図』(宝暦年間(一七五一―一六四)成立 香川県立ミュージアム蔵)のように大名間でも図譜の貸借・転写が行われたことが知られているが、本品の転写元は管見においては確認できていないことを記しておく。また、本品に文字による注釈等がないのに対し、基本的に本草学・博物学の目するところは対象となる品々の収集、分類や種別同定などの考証、そして記録であり、文字情報を大事にしていることも傍証となろう。

とはいえ本品写生図に本草学・博物学的視点が全くないわけではない。先のとおり、それぞれ採集された標本などをもとに絵画化された可能性が高いが、にもかかわらず生物はいずれも生き生きと描かれている。例えば昆虫は、死んだ個体は足の関節が曲がり縮こまるのが通常であるが、本品では各昆虫とも足を地面に着け、あるいは何かに捕まっているかのような状態で描かれている。魚類は黒目を濃墨で描いた上に青を点じることで瑞々しさを表現し、個体によつては雲母や金泥で体部の光沢感を演出している。特に仮番号68「メナダ」は魚類のうちでもっとも体長が長く、堂々と描かれており、背の部分の鱗には金泥、陰となる腹部分の鱗には銀泥が

用いられて、水中を泳ぐ魚に光が当たり、輝く様子を表現している(図4)。全体に細部の表現も入念で、仮番号41「アカメガシワ」の果皮の刺状突起や、仮番号48「キアゲハ」など昆虫や蟹の体部の産毛を丹念に描いている(図8)。仮番号55・56「ミンミンゼミ」では透明な翅を表現するべく雲母を引き、金泥も用いて翅脈を細かく表したり(図9)、また仮番号79「アミメキンセンガニ」では細い触覚を胡粉でやや盛り上げて描いたりしている(図7)。いずれも各生物の色彩・形態や質感を表すための描写であり、実証を重視する本草学・博物学には必須の、観察に基づいて行われていると考えられるのである。

今橋理子氏は本草学・博物学と写生画の密接な関わりを論じ、特に秋田蘭画家による花鳥画について、博物学がもたらした創造力の最も象徴的な形象であると指摘されている⁽³⁴⁾。本品についても、草木虫魚を描いた写生画であり、かつ先述のとおり本草学・博物学の影響は明らかであることから、写生画と本草・博物図譜との交点に位置付けられる作品と言えるだろう。

いまだし本品写生図の特徴を示しておきたい。構図に目を移すと、先に述べたとおり各生物は単独で描かれる場合と、複数の個体が重なり合つて描かれる場合とがある。単独で描かれる場合、仮番号27(挿図1)のように左右のモチーフの間に偶然できた空間に描いたかと思われる、あまり作為を感じない箇所もあるが、昆虫類と甲殻類を描いた場面(図10、挿図1)のように、色彩鮮やかに多様な視点・方向から描かれた各図が間隔を保つて散りばめられ、その配置・配色によつて整えられた美しさが表出されている箇所もある。ところで先に確認したとおり、仮番号17「ハツタケ」や仮番号79「アミメキンセンガニ」は他の分類の生物とともに描かれていた。

画面構成に注意して再度見てみると、「ハツタケ」はイネ科の細長い形態の植物に混じって一際存在感を示し、「アミメキンセンガニ」は色彩・模様も相まって、魚類のなかで異彩を放っている。両者とも鑑賞者の目を引くアクセントとなっており、「ハツタケ」は画面に調和をもたらし、「アミメキンセンガニ」は画面にリズムを与えている。分類による秩序を超え、このような画面構成に至らしめる要因は、絵画的な面白さや美しさを追求する姿勢に他ならない。昆虫類の場面にも、モチーフの組み合わせにより調和のとれた画面を創出しようとする絵師の創意を感じ取ることができる。

他に比してモチーフの混交がより複雑なのが、魚類を描いた場面(挿図



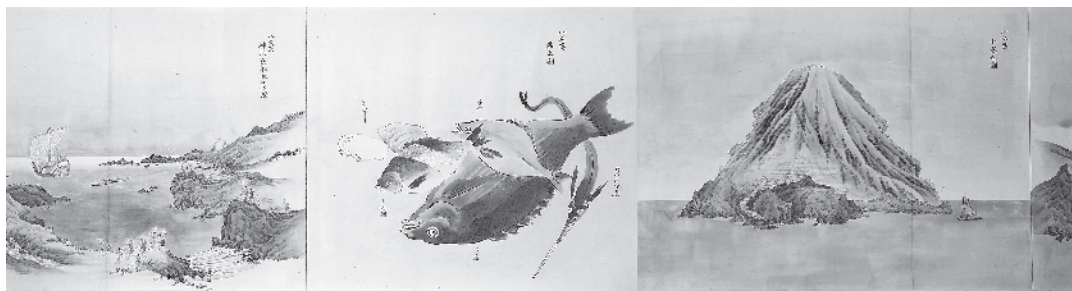
挿図9 岡部洞水筆「魚族図」 長崎歴史文化博物館蔵

1)であるが、この構図・構成については、伝統的な藻魚図などと近似するように思われる。中国で人気を博した藻魚図は、日本でも鎌倉・室町時代から様々な絵師によって描かれ、江戸中期以降には博物図譜や南蘋派の影響のもと、さらに多様な展開をみせた。例えば土浦藩に御絵師として仕えた岡部洞水(生年未詳〜一七八〇〜一八五〇)による「魚族図」(挿図9、長崎歴史文化博物館蔵)は本品と同様の傾向にあり、魚類はそれぞれ本草・博物学的な見地から高い精度で描かれ、それらが有機的に配されて幾重にも重なる構成を取っている。岡部洞水は狩野派の絵師で、谷文晁を中心とする江戸の文人サークルとの交流が指摘されている。³⁵⁾このように本品写生図には写生画と本草・博物図譜との交点が見られるとともに、伝統的画題が同居しており、十九世紀における絵画様式の混交と多様化を反映していると捉えることができる。

五 本品の製作背景

本品について、ここまで実景図と写生図とを分けてその特徴を述べてきたが、以上を踏まえ、本品成立の背景を考えてみたい。

実景図と写生図を組み合わせる構成は、立原杏所筆「鴻爪画卷」(文政八年〔一八二五〕 個人蔵)・「北越山水図巻」(天保六年〔一八三五〕 早稲田大学會津弥一記念博物館蔵)・「遊歴図巻」(茨城県立歴史館蔵)などにみられる。これらは旅先のスケッチをまとめた画卷で、山海の眺望や寺社などの実景図とともに、草花・昆虫・仏像などの写生図が織り交ぜられている。高川文筆「八丈島図」(挿図10、弘化四年〔一八四七〕 真田宝物館蔵)では、島々の全景や港・岬を描いた実景図とともに、島における風俗の図や、海獺(アシカ)・



挿図10 高川文筆「八丈島図」 部分 真田宝物館蔵

魚類の写生図などが織り交ぜられている。いずれも絵画が主体で、墨書は場所や名称などを示す簡易な内容に留められている。

十八〜十九世紀の日本の絵師には、観察から得た知見を絵画によって記述する傾向があると指摘されており、これらの画巻はまさにその産物と言える。遠景から近景、さらにクローズアップされた風俗や生物に至るまで、連続する画面において視点を自在に手前や奥に移動させながら、絵画によって知見を説明する作例が生み出され、享受する側も、実景図・写生図・風俗図など多様な形式で表された事柄を自在に紐付けて読み解くことができた時代的素地のもと、本品は製作されたのである。ただし、本品においてはこの構造がさらに整理され、墨書も添えられことなく展開しており、享受する側に手掛かりがなくとも理解できる事柄を描いているという様相が看守される。

では本品における実景図と写生図は、何を意図して組み合わせられているのだろうか。前章における写生図の考察では、本草学・博物学に感覚的に近い観察に基づい

て各生物の色彩・形態や質感を表すための描写がなされていることを指摘した。これはすなわち、生物の生来の美しさに目を向けた表現であると言い換えることができる。それらが絵画的な面白さや調和を追求する画面構成の中に展開されていることは、すなわち美しい画面の創出を意味する。

ここで第三章に述べた実景図の特性を思い起こすと、本品の実景図は築地蔵屋敷の見どころを象徴的・重点的に絵画化しており、「名苑」を描く意識のもと製作されていた。このことから、写生図もまた築地蔵屋敷の名苑たる由縁として描かれているとは捉えられないだろうか。絵画的に美しい画面は、それだけで鑑賞者を魅きつける。屋敷図によって尾張家の庭園に招き入れられた鑑賞者は、続けてその屋敷に生息する生き生きとした生物に遭遇し、植物・昆虫・魚類と充分にその魅力を味わったのち、江戸湾図に描かれる広々とした内海の光景を目にするのである。実景図・写生図とも季節は夏であり、夏季の漁猟を沿岸の庭園ならではの誇るべき特性と捉えていたことからしても、本品には実景図・写生図を通じて、築地蔵屋敷の魅力之余すことなく描こうとする意思が通っていると言える。

尾張家で築地蔵屋敷の名苑としての絵画化が望まれていたのはいつ頃であらうか。先に確認したとおり、実景図の検討から、本品は十九世紀関東画壇において製作されたと考えられる。この時期は、庭園・園芸に造詣の深かった十一代将軍家斉の影響下で尾張家を含む各大名家の庭園の整備が進み、隣接する浜御殿でも家斉の時代に庭園としての機能充実が図られ、御成も頻繁に行われたと知られる。浜御殿を積極的に利用する傾向が十二代将軍家慶にも引き継がれるなか、尾張家においても臨海に所在する名苑が望まれたと考えるのは難しくないだろう。築地蔵屋敷は、十八世紀後半から十九世紀初期の間の変遷が未詳であるため、江戸湾側に砲台が設置さ

れたと見られる嘉永六年（一八五三）頃を下限として、製作年代はおおよそ十九世紀前半に絞り込むのがまずは妥当である。しかしながら、文政三年（一八二〇）から天保三年（一八三二）の間の一時期、舟溜が埋まるなど管理が手薄になり、その後、「築地御屋敷之図」が成立した弘化元年（一八四四）から嘉永六年（一八五三）頃までの間に、庭園として開発が進められた様子が見受けられたことを思い起こすと、本品成立の時期を十九世紀第二四半期に想定することも一つの可能性と考えられよう。

このように尾張家で築地蔵屋敷の名苑としての絵画化が望まれ、その結果本品が製作されたとして、それを命じた人物についても一考しておきたい。江戸時代における本草学・博物学に大名が深く関わっていることは周知の通りであり、松平頼恭・細川重賢・島津重豪ら、本草学・博物学に特に傾倒した大名は博物大名と称される。尾張家の当主のうちに、いわゆる博物大名というほどの人物は現れなかったが、特に庭園や本草学・博物学の分野に関心を寄せていたと思われる当主としては、十八世紀中期に新たな写生画として流行した長崎南蘋派の花鳥画を注文し、愛蔵したと知られる八代宗勝、藩士・内藤東甫に命じて尾張初の本格的な地誌であり産物として絵図も掲載する『張州雜志』を編纂させた九代宗睦、造園・園芸に造詣が深かった十代斉朝（二七九三―一八五〇）、動植物の描写に定評のあった江戸南蘋派の紫岡を登用した十一代斉温（一八一九―三九）、博物学に関心をもち昆虫や植物の標本・図譜を作製した十四代慶勝が挙げられる。⁽³⁷⁾ 本品製作の時期からして十代斉朝以降が想定されるが、現段階ではいずれの当主とも判別し難い。

ところで、尾張家で南蘋派が重用されていることには注目しておきたい。⁽³⁸⁾ 文政十二年（一八二九）に御目見絵師を拝命した紫岡は、南蘋派特有の

細密描法や文人画・南宗画の技法を学び、大成した写生法を江戸にもたらした宋紫石の孫にあたる。天保四年に御絵師見習となり、同七年に御絵師に昇格、嘉永三年に歿するまで御絵師として尾張家に仕え、息子・紫潤（楠本圭山）も父の歿年に尾張家の御絵師見習に任じられている。紫岡もまた本草学・博物学に関わりがあり、十一代斉温の命により天保七年（一八三六）に將軍家より原本を借用して模写した「百鳥図」五卷（徳川美術館蔵）や、弘化三年（一八四六）に本草学者・岡元鳳著『毛詩品物図攷』を紫潤とともに校訂し模写した「毛詩品物図攷」三冊（名古屋蓬左文庫蔵）がある。紫岡は市ヶ谷屋敷の庭園・楽々園を題材とする「楽々園四季真景図巻」も描いており、庭園画にも足跡があるが、本品とは法量が大幅に異なっており直ちに比較はできない。今は一つの可能性として提示するにとどめ、後考に待ちたい。

おわりに

以上、本品について、築地蔵屋敷に関する記録や絵図を確認した上で、実景図・写生図それぞれの特徴を述べるとともに、本品成立の背景を考察してきた。

実景図は、江戸湾図に本紙一紙分をあて、風光明媚な築地の広々とした視野を再現するように製作されていること、画中に人物が描かれない中、漁具が築地蔵屋敷の誇るべき遊興の一つだった漁猟を象徴的に示していることを述べ、さらに屋敷図・江戸湾図とも築地蔵屋敷の見どころであった八間橋を重点的に描いていることから、実景図には築地蔵屋敷の魅力を強調し「名苑」として描く意図が看取されることを述べた。また描写は細部

まで入念で、省略を控え、合理性を備えていることから、本品は、江戸狩野派の伝統様式と谷文晁らの新様式が混交し多様な展開をみせたとされる十九世紀関東画壇における庭園画のなかに位置付けるのが妥当であるとともに、尾張家における記録性・実利性を追求した庭園画の需要を背景に成立したと考えられることを述べた。

次に写生図は、全体の構成には当時の本草学の基礎文献であった李時珍著『本草綱目』の分類・構成に通じるところがあるが、標本を見たまま描いたと察せられる図が含まれており、名称や考証など文字による記述もないことから、製作の主眼は本草学・博物学的な観点には置かれていないと考察した。その上で、各生物は色彩・形態や質感を表すため細部まで念入りな描写がなされ、生き生きと描かれており、本草学・博物学に必要な観察に基づいていることを指摘した。また藻魚図という伝統的な画題も踏まえてみるとみられることから、本品には写生画と本草学・博物図譜とが伝統画題のなかに交わるという特性があることを論じた。

本品全体の構成としては、十八〜十九世紀の日本の絵師にみられる観察から得た知見を絵画によって記述する傾向を背景に、実景図と写生図を組み合わせることで、屋敷図によって尾張家の庭園に招き入れられた鑑賞者が、その屋敷に生息する魅力的な生物に遭遇したのち、江戸湾図に描かれる広々とした内海の光景を目にするという展開になっており、築地蔵屋敷の魅力之余すことなく描こうとする意思が通っていることを述べた。

尾張家で築地蔵屋敷の名苑としての絵画化が望まれていた時期として、十一代将軍家斉のもと各大名家の庭園が繁栄するなか、将軍家の浜御殿のように、尾張家においても臨海に所在する名苑が望まれたと考えられる。このことから、江戸湾側に砲台が設置されたと見られる嘉永六年

(一八五三)頃を下限として、本品の製作年代はおおよそ十九世紀前半とするのが妥当とした上で、庭園として再開発が進められたと考えられる十九世紀第二四半期に想定することも一つの可能性として提示した。

こうして描かれた本品が実際どのように用いられたか、現段階では未詳である。しかし文字による注記がないことを考えれば、当主が手にし、近しい人物らに披見させていたことも想定できよう。いずれにせよ今後の精査が必要な検討課題を多く残したが、まずは本品の紹介および築地蔵屋敷に関する史料提示という本稿の目的を果たせたと考える。拙稿が多方面の研究に資すれば幸いである。

註

- (1) 『江戸のワンダーランド 大名庭園』(徳川美術館 平成十六年十一月)。
- (2) 『アニマルランド 東アジアの美術に見る動物表現』(和泉市久保物記念美術館 平成十七年十月)中の河田昌之氏作品解説による。
- (3) 吉川美穂「尾張徳川家と近世絵画」(『徳川美術館名品集四 桃山・江戸絵画の美』 徳川美術館 平成二十年十一月)のほか、同氏による同書作品解説による。
- (4) 尾張家の屋敷については『徳川御三家 江戸屋敷発掘物語―尾張家への誘い』(新宿歴史博物館 平成十八年十月)、渋谷葉子「幕藩体制の形成過程と大名江戸藩邸―尾張藩を中心に」(『徳川林政史研究所研究紀要』三十四号 平成十二年三月)をはじめ、同氏による一連の研究に詳しい。
- (5) 安藤菊二「築地地区の蔵屋敷 尾州と芸州の蔵屋敷」(『郷土室だより』第八号 東京都中央区立京橋図書館 昭和五十年三月)。
- (6) b「東京廻 御側御道具類一巻 御道具懸附」(『什器旧原簿二十号』)には目録類が合綴されており、その内表紙の一つに「明治二年己八月 御手鑑 御巻物 雑図類 書拔 御道具懸 江戸表之御道具番立改懸ケ之分」とある。このことから山本泰一氏は、b掲載の品々は江戸の御側御道具であることを指摘し、

江戸から尾張へ運ばれ番立を改める前の蔵帳としてc「慶応二年寅七月江戸表

(一八六六)

の御取寄相成候御品 御手鑑 御巻物 御絵類 目録(什器古帳四十三号「御
什器二関スル参考書類」所収)を挙げ、b掲載の品々は慶応二年に尾張へ移さ
れたとした。(山本泰一「研究ノート 尾張徳川家の幕末期における什宝(収蔵
品)の種類と数量について(一)―絵画・書跡編―」「金鯢叢書」第三十一輯 徳
川黎明会 平成十六年十二月、同「研究ノート 尾張徳川家の幕末期における
什宝(収蔵品)の種類と数量について(二)―陶磁器・硝子器編―」「金鯢叢書」
第三十三輯 徳川黎明会 平成十八年十月)。

山本氏の指摘通り、b掲載の品がかつて江戸表の御側御道具であったことは
間違いない。加えてbでは長持番号ごとに名古屋城二之丸の良御槽・不火入御
土蔵・東鉄御門続きの多聞槽といった収納場所を注記していることから、bが
編纂された明治二年の時点において、掲載された品が名古屋城内で保管されて
いたことは確認できる。ただしc記載の品々は、bの手鑑・巻物・絵図類の目
録のうち、手鑑を中心とする品のおよそ四分の一程度であり、大部分は別の機
会に江戸(東京)から名古屋にもたらされたと考えるべきである。

a「明治元年東京廻書抜」は長持ごとに手鑑・絵巻物・歌書などに分類され
ており、一つ書きで作品名が列記された上部には、朱・墨で番号が記された作
品が多く、数点を除き、先に述べたbの長持番号および長持ごとに振られた作
品番号に符合する。a記載の品々は、bの手鑑・巻物・絵図類の目録に掲載さ
れた品のうち、約三分の一程度を占める。またcの作品とは数点を除き合致し
ない。以上のことから、aもまた、番立を改める前の蔵帳の一冊であると理解
される。

- (7) 佐藤豊三「享保時代における尾張徳川家の蔵帳整理について」(『金鯢叢書』
第二十五輯 徳川黎明会 平成十年八月)、前掲註(6)山本氏論文、香山里絵
「尾張徳川家における世襲財産附属物」(『金鯢叢書』第四十五輯 徳川黎明会
平成三十年三月)などに詳しい。

- (8) 築地図巻はb「東京廻 御側御道具類・巻 御道具懸附」において、「西不
火入 五番」長持の末尾の四十七として、左のとおりに記載される。

四十七

東人ハスミ 一 築地名苑真景草木虫魚写生御巻物 一卷
明治六年一月東京廻り

- (9) 築地蔵屋敷については、主に以下を参照して記述した。

- ・安藤菊二「築地地区の蔵屋敷 尾州と芸州の蔵屋敷」(前掲註(5)参照)。
- ・金行信輔「木挽町築地の形成―絵図と文献資料を読む―」(『江戸遺跡研究』
第三号 江戸遺跡研究会 平成二十八年三月)。
- ・「江戸御屋敷便覧」十八世紀中期以降成立、徳川林政史研究所蔵。
- ・「寛政十三四年春出来 御屋敷吟味」 徳川林政史研究所蔵。
- ・「大正八年七月 江戸御屋敷邸宅調査書」 徳川林政史研究所蔵。
- ・「尾藩世記」(名古屋市蓬左文庫編『名古屋叢書 三編 第二巻 尾藩世記
上』名古屋市教育委員会 昭和六十二年三月)。
- ・「御系譜」(名古屋市蓬左文庫編『名古屋叢書 三編 第一巻 尾張徳川家系
譜』名古屋市教育委員会 昭和六十三年三月)。
- ・安藤氏論文には、「尾張藩邸記」をはじめとする『東京市史稿』収録資料に
基づく内容が紹介されている。「江戸御屋敷便覧」は「尾張藩邸記」と概ね内
容が一致するものの一部異なる箇所があり、その場合には「江戸御屋敷便覧」
の記事に従った。

- (10) 前掲註(9)「江戸御屋敷便覧」参照。

- (11) 役職名については「藩士名寄」「士林沂泗」(いずれも名古屋市蓬左文庫蔵)・
「藩士名寄」(徳川林政史研究所蔵)に記録される。

- (12) 改称については前掲註(9)「尾藩世記」に本稿本文のまま記載がある。ただ
し「木挽町」の名はその後も散見されるため、通称として引き続き使われたと
考えるのが妥当である。

- (13) 明治二年(一八六九)築地蔵屋敷の土地に際する願書「名古屋藩願」(東京市役
所編『東京市史稿』市街篇四十九(東京都 昭和三十五年三月)など)による。

- (14) 東京市役所編『東京市史稿』救済篇三(臨川書店 昭和五十年五月)、東京都
編『東京市史稿』産業篇五十一(東京都 平成二十二年三月)などによる。切手

による米穀売払は文政十二年の願書により蛸殻町屋敷に移ったが、天保十三年には空米取引を理由に禁止された。

- (15) 「江戸御小納戸日記」は膨大な資料群であり通覧はできていない。今回、十九世紀の一部を試験的に調査したところ、例えば天保七年七月十五日条には当日の漁獵の次第が詳細に記録されていた。それによると、漁った魚は榎製で白木の「生桶」に入れ、十一代將軍徳川家斉・世子家慶・御台所・御簾中へ内々に献上されたほか、当時の尾張家当主・十一代斉温の生母おりのの方、同家十代斉朝の生母乗蓮院にも下され、斉温の召上り用にもされた。付家老成瀬正住や、当日の名代、築地御屋敷奉行などの家臣らには、労をねぎらう吸物・酒・肴などが下された、とある。

- (16) 徳川林政史研究所・藤田英昭氏にご教示いただいた。

- (17) 江戸湾内海の海防政策の変遷については、原剛『幕末海防史の研究』全国的にみた日本の海防態勢―(名著出版 昭和六十三年七月)に詳しい。

- (18) 蔵のうち一棟は「かき入明俵御蔵(明俵とは空き俵を指すようである)であるという。

- (19) 東京都編『東京市史稿』市街篇四十四(東京都 昭和三十三年三月)。

- (20) 舜林丸も御座船で、天和元年(一六八二)十二挺立の御座船として取り立てられ、享保年中に江戸へ廻された後、大破し解体されて船具が尾張へ送られた。この代わりに尾張から八挺立の浅瀬御座船・牡丹丸がもたらされ舜林丸と改号されたとある。舜林丸の記録に解体の年号は記されないが、浅瀬御召船・常盤丸の記録に宝暦十一年(一七六一)に舜林丸の船具を用いて再建されたとある。なお、鯨船は捕鯨用の俊敏な小型船をもとに造られた小型軍船、伝馬船は大型船から陸までの積荷輸送や曳船などに用いる小型船である。

- (21) 前掲註(15)に記載した「江戸御小納戸日記」の調査においては、この舟溜を「御泉水」と表記している箇所も見受けられた。

- (22) 小寺武久『尾張藩江戸下屋敷の謎』中央公論社 平成元年十二月。

- (23) 前掲註(17)原剛『幕末海防史の研究―全国的にみた日本の海防態勢―』参照。

浜御殿については、進士五十八・服部勉・大多和美佳「浜離宮庭園の生活

史的研究」(『東京農業大学農学集報』第三十五巻第一号 東京農業大学 平成二年十月)、服部勉・進士五十八「江戸期浜離宮庭園における回遊利用の図上復原についての研究」(『造園雑誌』五十四巻五号 日本造園学会 平成三年三月)、白幡洋三郎『大名庭園』(講談社 平成九年四月)、水谷三公『將軍の庭―浜離宮と幕末政治の風景』(中央公論新社 平成十四年五月)などを参照した。

- (24) 武部健一「江戸期橋梁の形式と地理的分布、特に刎橋について」(『土木史研究講演集』第三十回 土木学会土木史研究委員会 平成二十二年六月)に詳しい。

- (25) 十九世紀初頭頃の成立とみられる「浜御殿地向御庭向共惣絵図」(『東北大学附属図書館蔵』では「漁撈御留杭」と呼称されている。浜御殿については前掲註(23)を参照。

- (26) 前掲註(23)参照。

- (27) 今橋理子『江戸絵画と文学』(描写)と〈ことば〉の江戸文化史 東京大学出版会 平成十一年十月。

- (28) 谷文晁の実景図・庭園画とその後の展開については辻惟雄「真景」の系譜―中国と日本(下)―(『美術史論叢』第三号 東京大学文学部美術史研究室 昭和六十二年三月)、今橋理子『江戸絵画と文学』(描写)と〈ことば〉の江戸文化史(前掲註(27)参照)、鶴岡明美『江戸時代実景図の研究』(中央公論美術出版 平成二十四年十月)のほか、『美しき庭園画の世界―江戸絵画にみる現実の理想郷』(静岡県立美術館 平成二十九年十月)における野田麻美氏による各種論考・解説などに詳しい。

- (29) 『美しき庭園画の世界―江戸絵画にみる現実の理想郷』(前掲註(28)参照)における野田麻美氏論考・解説による。

- (30) 構成や構図に着目するならば、本品の実景図は例えば秋田藩士で秋田蘭画家の一人である荻津勝孝(一七四六―一八〇九)による「土崎港之図」と通じるところがある。「土崎港之図」は、港の四方を見廻すように東西南北の景観を描いた画卷で、寛政十一年(一七九九)に製作した旨の墨書がある。直接的な影響関係の有無はともかく、景観を現実即して記録するという点において、秋田蘭画と文晁一派、あるいはその影響を受けた画家らは共通の目標を持つてお

り、類型的な結果に至ったと考えることもできよう。今後さらに精査していきたい。

- (31) 薄田大輔「狩野惟信筆「戸山荘八景図巻」について―江戸狩野派の庭園図表現―」〔『金鯢叢書』第四十三輯 徳川黎明会 平成二十八年三月〕。

- (32) 種別同定の協力者は表1凡例に記したとおりである。

なお、表1の推定名称末尾に「か」と付される場合、本文中では省略して記載した。

- (33) 上野益三『日本博物学史』講談社 平成元年一月。

- (34) 今橋理子「江戸の花鳥画―博物学をめぐる文化とその表象」(スカイドア 平成七年四月)などに詳しい。

- (35) 堀部猛「土浦藩絵師 岡部洞水―知られざる狩野派の画人―」〔土浦藩絵師 岡部洞水―知られざる狩野派の画人―〕 土浦市立博物館 平成十四年三月)。

- (36) 前掲註(27)今橋理子『江戸絵画と文学 〈描写〉と〈ことば〉の江戸文化史』参照。

- (37) 竹内美砂子「尾張藩御用絵師と南蘋派―今村随学と宋紫岡」〔名古屋博物館研究紀要』第十三巻 名古屋博物館 平成二年三月)、同「尾張藩御用絵師と庭園画」〔名古屋博物館研究紀要』第十四巻 名古屋博物館 平成三年三月)、山本祐子「張州雑志」を調べる〔尾張資料のおもしろさ 原典を調べる』名古屋博物館 平成十六年十一月)、吉川美穂「尾張徳川家と近世絵画」〔徳川美術館名品集四 桃山・江戸絵画の美』徳川美術館 平成二十年十一月)、吉川美穂「殿様は愛すべきナチュラリスト」〔写真家大名・徳川慶勝の幕末維新 尾張藩主の知られざる決断』NHKプラネット中部 平成二十二年十月)などに詳しい。

なお、尾張は江戸・京都・長崎に次いで本草・博物学が盛んであり、十九世紀には水谷豊文や伊藤圭介を中心とする本草・博物学者により「嘗百社」が結

社され研究活動がなされていた。今後、嘗百社と尾張家との関連をさらに考慮していく必要がある。

- (38) 竹内美砂子「尾張藩御用絵師と南蘋派―今村随学と宋紫岡」、同「尾張藩御用絵師と庭園画」(いずれも前掲註(37)参照)。

- (39) 竹内美砂子氏は、「楽々園四季真景図巻」がかつて近衛家より売り立てられた経緯から、尾張家十一代斉温に近衛家から福君が興入れした天保七年(一八三六)前後を製作年代に想定された〔尾張藩御用絵師と庭園画〕(前掲註(37)参照)。しかし「慶応二年寅七月江戸表令御取寄相成候御品 御手鑑御巻物 御絵類 目録」当図巻の項には、慶応三年に近衛家による借用のため京都に差し立てた旨の朱書きがあり、製作年代は必ずしも近衛家と関わりないと判明するため、再検討が必要である。

【付記】

本稿執筆にあたり、名古屋港水族館・渡辺格郎氏、名古屋城総合事務所・今井田春美氏、金城学院大学名誉教授・小野知洋氏、元金城学院大学講師・森勇一氏、栄徳高校教諭・水野利彦氏、名古屋昆虫同好会・間野隆裕氏、北海道教育大学名誉教授・生方秀紀氏、鳥取大学教授・唐澤重孝氏、広島大学准教授・富川光氏、鳥取県山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館・太田悠造氏をはじめ、多くの方から写生図に関するご指導・ご協力を頂戴しました。また、名古屋市蓬左文庫長・鳥居和之氏、名古屋城学芸員・木村慎平氏、元名古屋博物館学芸員・山本祐子氏には名古屋市蓬左文庫や徳川林政史研究所が所蔵する関連資料についてご教示賜りました。名古屋博物館学芸員・津田卓子氏、同館学芸員・羽柴亜弥氏、同館研究員・桐原千文氏には調査にご協力いただきました。長崎歴史文化博物館および真田宝物館には写真提供・掲載をご快諾いただきました。徳川美術館・徳川林政史研究所の諸先学にも懇切なご指導を賜りました。記して心よりお礼申し上げます。

(徳川美術館 学芸員)

金鯨叢書 第四十七輯 [年一回刊行]

——史学美術史論文集——

令和二年三月三十日 編集
令和二年三月三十日 印刷・発行

編集者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川義崇

発行者

公益財団法人 徳川黎明会
電話(3950)〇一二番(代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一

徳川林政史研究所
電話(3950)〇一二番(代)

〒461-0023 名古屋市東区徳川町一〇一七

徳川美術館
電話(935)六二六二番(代)

〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町二

印刷所
株式会社 同朋舎
電話(361)九二二番(代)